

きたが、私の家があった中心部は道路も建物もすべて改装され、当然のことながら私の家は知るよしもなかった。大連地区は満鉄が建築した建造物、即ち大連大和ホテル、大連病院、満鉄本社などがそのまま残り、有効に活用されているのは大きな喜びであった。立派な遺産として残っていることは、我々にとってわずかな慰めかもしれない。

終戦そして引揚げ

千葉県 神崎 田鶴子

私は、大正十一（一九二二）年に旅順で生まれ、父が官吏であったので、その転勤に従って大連に移り、そこで大連の伏見台小学校に入学し五年生まで在学、再び旅順に戻り旅順第一小学校を経て、昭和九（一九三四）年四月に旅順高等女学校に入学、平穩で落ち着いた生活の日々で何一つ不自由なく過ごしていた。

昭和十三年の春、旅順高女から内地の学校に進学することとなり、東京の青山学院に入った。日本を取り巻く情勢が日一日ときな臭くなってきた昭和十六年春に、三年間の蛍雪の功がなり卒業。両親の膝下に戻り、一時南満州鉄道株式会社の総裁室能率班に務めていたが、昭和十八年の春、望まれて旅順の康德女学校の教師となった。

この康德女学校という学校は、中国人の女子の

みの学校で、その創設者の金顕珊名誉校長は清朝
肅親王の第三王女であって、由緒ある女学校であ
った。

私は、この康德女学校に奉職していたときに八
月十五日を迎えた。私の引揚労苦記録はここから
始めることとする。

当時、四年生を受け持っていた私は、夏休み返
上の生徒と共に、校庭の隅に防空壕を掘っていた
が、職員室に戻るようにとの連絡に、三年担当の
茶屋先生と一緒にもんぺの泥を払い汗を拭きなが
ら校舎に戻ると、職員室にはもう他の先生方も集
まっていた。

村井校長より「天皇陛下の玉音放送があるので
一緒に聞くように」との言葉に、一瞬何のことか
分からなかったが、天皇陛下のお言葉など何うの
は初めてのことであり、緊張しながら耳を傾けた
が、ラジオは雑音が激しく内容はよく分からなか
った。

しかし、どうやら四年近く続いた大東亜戦争が

終わり、日本は敗北と分かったとき、「なぜ？」ど
うして？」という思いと同時に、全身の力が抜け
ていくのを感じ、茶屋先生と顔を見合わせた。

やがて職員会議となり、「学校は閉鎖となるこ
と」「寄宿舎生を親許に帰省させること」「残務整
理についてのこと」などが協議された。

二、三日後、生徒のいなくなった校舎で片付け
をしていると、母から電話があり、今町の中にソ
連兵が入って来て銀行や郵便局は占領され、道行
く人たちは次々に銃を突き付けられて、お金や腕
時計を盗まれて大変な騒ぎになっているので、危
ないからすぐ帰って来るようにとのことだった。

それから数日後の、忘れもしない八月二十二日
のこと、これが最後のお米の配給になるというの
で、受取に行つての帰り道、ごうごうと響いてく
る音の方に目をやると、異様な光景が飛び込んで
きた。それは数台の戦車を連ねたソ連軍の進駐だ
ったが、前方に突き出た大砲には、なんと真赤な
布をかぶった女性がまたがり、後から兵隊が抱き

かかえながらわいわいと騒いでいた。それまで軍隊といえば、最も規律正しい日本の軍隊しか知らぬ私は、ただただ驚くばかりだったが、私の目にはそれは軍隊などではなく、荒れ狂う野獣の群れとしか映らなかつた。

急ぎ帰り道を歩いて行くと、人気の無い道を珍しい恰好をした男性がゆつくりと歩いていたが、私が追いつくと「この向うに海がありますか？」と訪ねられた。そして大東亜戦争に敗れた口惜しさなどを話しながら歩いていると、その方は私の顔をじっと見ながら「あなたは男に生まれていたら、きつと特攻隊に一番だったに違いない」と言われた。茶人がかぶるような茶色の頭巾と、白い和服に袴という姿の初老と思われるその方に、私は「どこからいらしたのですか？」と聞くと、「私は関東神宮の宮司です」と言われた。そして「元気で頑張って下さいね」と言いつつ海の方へ行かれたが、あのころあのような姿でなぜ海へ行かれたのだろうか、ずっと心に残っていた。

そして、野獣たちの日本人に対する略奪や婦女暴行が始まり、私たちは一步も外に出ることができなくなつた。どうすればいいのだろうと考えた末、私は思い切つて髪の毛を短く切り男の子に変装した。いざというときには敵を刺すか、また叶わぬときは自分ののどを突いて死のうと、首から小さなナイフをぶらさげ肌身離さず持っていたが、今考えるとあんな小さなナイフでは何もできなかったかと思うが、そのときは真剣にいつも身構えていた。しかしときには、こんないやな思いをするのなら、むしろB29の爆弾に当たつて死んだほうが良い、とさえ思つたりした。

当時、父は長い間の官吏生活を終え、牛乳統制会社のマネージャーとして毎日バスで大連へ通つており、官舎を出て黄金台ヤマトホテルのあき別荘を借り祖母、母、私の四人で住んでいた。大連にいた姉が、夫が召集されて北満の方へ行つてしまったので、赤ん坊を連れて来ていたところへ、鞍山にいた母方の叔母と三姉妹と赤ん坊二人に中

学生の子と計七人が製銅所の空爆を期に我が家を頼って来ていたので、総勢十三人の大家族となっていた。

ある日、ホテルから緊急の連絡があった。黄金台は町から離れているために、今までもソ連軍に気付かれなかったが、さつき彼ら数人がホテルにやって来て別荘周辺をうろついていたので、「今夜は危険だから婦女子は至急ホテルに避難するように。男子は皆で周囲を警備するから」とのことだった。「それ！」と皆でホテルに駆け込むと、十数軒の別荘住まいの人々と一室に入った。ホテルの人は「皆さんのことは我々男性が守りますが、皆さんは音をたてぬよう静かに。お子さんのいらっしゃる方は、泣いたり騒いだりさせないように充分に気をつけて下さい」と言った。赤ん坊をかかえた姉と二人の従姉妹は、必死にあやしたりミルクを飲ませたりしながら、数時間が過ぎ夜が明け、何ごとも無く各々の家に戻ったが、それから間もなくして電話は不通となり、水道も出なくなつて

しまった。

父は「こんな状態ではとても生活してはいけなし、第一黄金台は町から離れていて戸数もわずかで危険だから、大連へ移った方が良い」と言った。しかし、既に汽車もバスも不通となっており、どうやって大連まで行けば良いのか思案していたが、ふと私は康徳女学校の生徒の家が旅大道路の途中にあり、以前家庭訪問をしたことを思い出し、それを頼りに夜になってから歩いて行こうと提案した。最初は、乳飲み子をかかえてはとも無理だと両親たちは反対していたが、さりとて他に良い方法も思い浮かばず、思い切って今夜決行しようとして相談していたときだった。黄金台を下った所にある土屋町交番のお巡りさんが、制服の上着を脱ぎシャツ姿で駆け込んで来た。そして、息を切らせながら「今大連から市役所に連絡のために密行のバスが来たが、連絡が終わるとすぐに大連へ戻るので、お嬢さんたちはそのバスで大連へ逃げ下下さい。急いで下さいよ！」と言うと、私たち

がお札を言う間もなく走り去って行った。「お父さんやお母さんはあとから行くので、とにかくお前たちはすぐ土屋町の交番へ行きなさい」と言う父、「これを持って行きなさい」と叔母がお握りを作ってくれ、母はお財布をくれた。赤ん坊を三角巾でしっかり胸に抱いた姉、従姉妹たちと裏の細い山道を駆け下りたとたん、「ヒューン」という音と共に銃弾が飛んできた。狙われたと思った私は、咄嗟に「伏せて！」と叫びながら脇の草むらに飛び込み伏せた。

しばらくじっとしていると、銃声は聞こえなくなったので、バスが行ってしまったら大変だからと、また山道を駆け下り土屋町交番に飛び込んだ。とすぐに父が来て、間もなく民政署の方からバスが来た。「バスは止まらないが、徐行してくれるから走りながら飛び乗りなさい」と言い、お巡りさんが手をあげるとバスはスピードを緩めてくれた。父は、バスの乗車口の把手を片手で握り、走りながら私たちを一人一人バスに押し上げ乗せてく

れたが、最後に中学生の従兄弟が来ると、ほっとしたように手を振った。

バスのスピードが出たときだった。道端にソ連兵が立っていて、止まれというように手をあげた。するとバスの運転手はスピードを緩めた。「あー駄目だ」と、私は胸のナイフを取り出した。そのとき、止まると見せかけたバスは急に速度をあげ猛スピードで走り、あつという間もなく白銀山トンネルを抜けた。早鐘を打つようにどきどきの胸を押さえて後方を見たが、ソ連兵が追って来る様子はなくほっとしたときは、中学生の従兄弟が「お姉ちゃんどうしよう！」と言うので見ると、叔母が持たせてくれたお握りがバスの床に転がっていた。

そして無事大連に着き姉の家に落ち着いた夜、私たちは泥にまみれたお握りを何回も何回も洗い、お粥にして食べた。

そして後になって知ったのは、私たちが黄金台から逃げるときに銃弾が飛んできたのは、私たちが

を狙ったのではなく、海軍の物資部の倉庫にあったいろいろな品を盗みに行った中国人を、ソ連兵が撃った流れ弾だったということだった。

そして、あのとき電話も通じなくなっていたため山を駆け上がって知らせて下さり、黄金台から脱出させていただいたあのお巡りさんは、一つ間違えばソ連兵に襲われ命を落としていたかも知わらなかった私たちの、命の恩人であった。祖国日本に帰ってから、何年もかかってやっと埼玉県にいらっしやるのが分かり、お目にかかって一言御礼をと思い急いで電話をしたが、ご本人は既に亡くなられたというご家族の言葉に、「ああ、もう少し早く分かれば」と悔やまれ涙がこぼれた。それまではしっかりとそのお巡りさんの名前を覚えていたのに、あれから何十年も経ち八十半ばとなった今の私は、あの大切な命の恩人の名前をどうしても思い出すことができず、ただただ申し訳なく思うばかりだ。

大連の姉の家へ落ち着いて三、四日後、両親と

叔母が祖母を連れ、荷馬車を雇って持てる限りの食糧や衣類を積んで来た。何分にも人数が多いので、以前待合だったという大きな家へ引越したが、そこには既に幾組かの家族が入っていた。

そのころになると、最初に進駐して来たあの野獣のようなソ連兵に代わって家族持ちの部隊が来ていたので、治安は大分良くなり昼間は外にも出られるようになったが、日本の陸海軍の兵士や警察官は武装解除されてシベリアへ送られるようになり、一般市民の不安は深まるばかりだった。そんなある日、旅順で親しくしていた警察署の宮成警部の義弟で、海軍の兵曹だったSさんが、シベリアへ送られる汽車が大連駅に停車したときに戦友と二人で脱走して来た。父はすぐに二人を会社に連れて行き、牛乳ビン洗いの雑役夫としてかくまった。当初、二人はもちろんのこと私たちももしソ連兵が探索に来たらどうしようかととはらばらどきどきしていたが、それどころかそれからしばらくして、今度は宮成警部がこれまたシベリアへ

送られる途中で逃げて来られたときには、本当に驚いた。警部は、汽車が普蘭店付近を通過する真夜中にトイレの窓から飛び降り、昼間は高粱畑の中に身を隠し、幾日もかかつて大連まで戻ったので、飛び降りたときに負った額の大きな傷が痛々しかった。

宮成警部とその義弟も変名してあらゆることに気を付けていたが、私たちも苗字を間違えないようにいつも気を付けていた。

父は相変わらず会社に出ており、ソ連軍事司令部の要請で軍隊に牛乳を納めたが、なかなか代金を支払ってくれないと言っていた。

少しずつ治安は良くなったと言っても相手はソ連人のこと、いづどんなことになるやも分からずいし、この先果たして食って行かれるかどうか心配になった私は、ある日瓶洗いの二人に頼んでボディガードになってもらい、私がつけていた「チャイナドレス」を二枚持ち、浪速町へ出掛けて「オオ（いる？）」「プヤオ（いらぬ？）」と言って

立ち売りをすることにした。ドレスを見せたとたん「ワァッ！」と声をあげて中国人が集まり、たちまち良い値で売れた。味をしめた私は、それから自分の衣類はもちろんのこと従姉妹や母たちの物を手に毎日街へ出掛けたが、いつも完売となりほくほく顔で帰っていた。間もなくすると、それを真似てあちこちで物を売る日本人が現れ、あつという間に街は立ち売りの日本人とそれを買ってくるソ連人や中国人で野外市場のようになった。自慢する訳ではないが、立ち売りの元祖はこの私だと思っている。

そんなころ、祖母が一週間ほど昏々と眠り続けた末に静かに息をひきとった。お葬式などはもちろんのこと、お坊さんに来てもらうこともできずに、どうしようと話し合っているとき、「おばあちゃんはお私たちが」と申し出た瓶洗いの二人が、お棺を担いで火葬場へ行きお骨にして持って来てくれた。

そのころになると立ち売りの品もぼつぼつ底を

ついで来たが、お金もかなり貯まったので何か別のことをしようと思っていたとき、一見ブローカーのような感じの人に「この辺に喫茶店はありませんか」と尋ねられた。その言葉に「そうだ喫茶店を開こう」と意気込んで両親に話をする、「そういうのを武士の商法と言う。とても無理だ！」と一笑に付されたが、これから先いつ日本に帰れるかも分からず、何かしなければと私は強引に押し込んだ。そして、信濃町にあった以前小児科医院だったという建物を借りた。コーヒー豆を売っている店に行きコーヒーのいれ方を教えてもらったが、それは厚地のフランネルの中に豆から挽いた粉コーヒーを入れ、上から熱湯を注いで布の両端を絞るという方法だった。これがなかなかの大仕事だった。私は得意のプリン売物をしようかと思いい、店の前に「プリンの店。喫茶店アカシヤ」と手書きの小さい看板を出し、プリンを二十個作って店を開けた。

果たしてお客さんが来てくれるだろうかと内心

どきどきしながら開店したのだが、幸いにも初日からお客が入り、このプリンが評判になった。お重箱を持って来て一度に十個も買って行かれる方もあったりして、私は毎晩一時二時までプリンを作り、店のサービスは高子さんという十六、七の可愛い、しかもとても利発な娘さんに任せた。彼女も今はもう七十半ばを過ぎていると思うが、元気だろうかと時々当時を思い出す。

喫茶店を開く少し前、応召して北満の部隊に行っていた姉の夫が帰って来ていたが、無蓋車に乗り幾日も雨に濡れながらの帰還だったため、風邪をひき寝込んでいた。その様子を見た父が「ひよっとすると彼は結核ではないだろうか？もしそうだとはいけないから子供は別の部屋に移すように」と言ったが、とき既に遅く父の心配は的中し、幼子は結核性脳膜炎にかかりあつという間に短い生涯を終えた。姉夫婦は昭和二十二年三月末に引揚げて、本籍地が茨城県だったので、荒川沖の引揚寮にたどり着いて義兄はすぐに土浦の病院へ担

ぎ込まれたが、それから間もなく帰らぬ人となつてしまった。まだ三十を過ぎたばかりだったのに。

幼子が熱を出したときにやっと探して往診してもらった医師は、薬も何も無いのですよと言っていたが、平和なときだったら結核などでそんなに簡単に命を失うこともなかったであろうし、私自身も、二十代という最も輝いていた青春時代を、来る日も来る日も防空壕掘りと粗食に甘んじ、勝利を信じすべて我慢々々の連続だったのに、戦争という二文字によってすべての人の運命が破壊されてしまったことを、今もなお本当に口惜しく思う。

だれもが、皆祖国に帰る日を待ちながら今までやったことの無いような仕事をしていたが、従姉妹も父の会社で牛乳配達をし、茶谷先生と一升瓶を両手に何本も持って配達していた。そして、配達が終わると私と二人で餃子を作り屋台を出した。ある日、一人のソ連軍の将校がやって来たので二人で身構えると、手真似で餃子を食べたいと言う

ので急いで焼いて出すと、ペロリと平らげたとなんすたすたと行ってしまった。私たちは追い駆けて請求することもできず二人で口惜しがった。商売女を抱きかかえながら進駐して来たあの野獣兵と言ひ、食い逃げを平気でするソ連軍の将校と言ひ、勝てば官軍、負ければ賊軍と二人は耐えた。彼らは味をしめてまたやって来るかもわからないし、危険だからと思ひ屋台はやめにした。

「喫茶アカシヤ」は結構繁盛していたので、私は夜遅くまで相変わらずプリン作りを続けていたが、ある朝起きて二階の窓からなにげなく下を見た私は、店の前に赤ん坊を背負って小さな台の上の南京豆を売っている女性を見て驚いた。彼女は、旅順第一小学校に在学中、一番の仲良しだった、あの節ちゃんだった。彼女は、女学校を卒業するとすぐ旅順工大を出られた方と結婚し、奉天（瀋陽）で新婚生活を送っていたが、私が東京の学校を卒業して旅順へ帰ったころには、もう二人のお母さんになっていた。私はすぐに彼女を部屋に通

し、二人は思いがけない再会を喜んだが、私は節ちゃんの話聞き涙が止まらなかった。

終戦の少し前にご主人を応召されたので、彼女は旅順の実家に戻り終戦を迎えることになったが、二女が具合が悪くなったころ旅順を立ち退かなければならなくなり、医者は自分たちの逃げる準備で精いっぱい病人を診てはくれず、二女は冷たくなってしまい、遺体を家に連れて帰り、庭で木の枝や古板を集め、自分の手で子供を火葬にしたという話だった。可愛がっていた姉の子が逝ってしまったとき、目が腫れて人前に出られぬほど泣いた私だったが、節ちゃんは自分の子供をどんな思いで焼いたのだろうと思うと、涙は止まらなかった。

シベリアへ移送される汽車から跳び下りて逃げて帰られた宮成さんは、時々現れて父と何やら話をしていたが、ある日の午後、子供を背負って帽子を目深にかぶった女性を連れて来て、しばらくかくまって欲しいと言った。宮成さんが旅順警察

署にいたとき、部下に腕利きの松尾という刑事がいて大変可愛がっていたが、終戦後監獄が解放されて、囚人たちは自由になるとすぐに「松尾を捕えろ！」「松尾を捕えた者には五万円の賞金を出す」というようなうわさが流れたので、宮成さんは早く松尾一家を日本へ返したいと考えていたようだったが、その日かくまって欲しいと連れて来たのは松尾刑事の奥さんだった。

それから二時間ほど経って、今度は松尾刑事を伴って現れ、二階で何やら話をしていたようだったが、日が暮れたころ、いつの間にか宮成さんも松尾夫婦も姿を消していた。

店を閉めてから、私は父から宮成さんが松尾刑事一家を密航船に乗せたと聞かされ、「あんな小さな子供を連れ、無事に日本へたどり着けるのだろうか、どうか神様助けて下さい」と祈った。あのとき小学校の一年生だった長男の博元君は現在北九州市に住んでおり、時々電話をくれたり、もう一度旅順に行こうなどと話し合ったりしている。

松尾一家が密航船で脱出してからしばらくして、初めての引揚船が入港し、日本へ帰れると喜んだが、そう簡単には話は進まなかった。

そんなころ、いつも五時半ごろには帰宅する父がなかなか帰って来ないので、何かあったのかも心配していると、父は中国の市政府に捕らえられて投獄されたという連絡が会社から入った。しかも罪名は窃盗とのことで、私たちは何が何だかさっぱり分からず、どうしようと焦ってしまった。そのとき体調悪く寝ていた義兄が起き上がり電話をかけていた。やがて武田さんという義兄の友人が駆けつけて来られると「大丈夫ですよ、お父さんは必ず助けますから」と言い出て行かれたが、二時間ほど経つと父を連れて帰って来てくれた。父が捕まった理由はただただ呆れるばかりのことだった。ソ連軍に納めた牛乳代を支払ってもらえぬため社員の給料が出せないと、父はソ連軍司令部に出掛けると「本国からの送金が遅れているので、もう少し待て」と言うので、父は「もう何

カ月にもなるので待てない」と言う。「では現金の代わりに石炭ではどうか」と言うことで、父はOKして帰社すると、翌日から約束通りにトラックで次々に石炭が運び込まれて来たので換金しようとしていたところ、突如中国市政府に捕まったとのこと。それもそのはず、その石炭は中国の貯炭場に積まれたものだった。ソ連という国の軍隊は、平気な顔で泥棒をしたのである。

父を助け出して下さった武田さんという方は、義兄の話によると中国人が彼のことを本当の中国人と間違えるほど中国語が堪能で、ロシア語も非常に上手とのことだったが、義兄の友人と違っても義兄と同じ単なる満鉄マンではなく、何か特別に活躍されていたのではないかと思ったりした。思いもよらず留置所に放り込まれた父は助けられたが、牛乳代はもらえず会社は閉められた。

日本への帰国を迅速円滑に進めるために各町会に「引揚対策協議会」が設立されていて、父も私も顔を出すことになった。婦人部に回された私は、

友沢さんという婦人部長を紹介されると、副部長に任命された。友沢部長は大連百貨店に勤務されていた方で、一見男性と思うような体格で髪も男性と同じシングルカットだった。

婦人部は何をすれば良いかを相談したが、ご主人が出征されたままで働きたくても子供がいて動けないお母さん方のために、託児所を作ろうということになった。部長と私はそのころどのくらい金額だったのか覚えていないが、お金を出し合っただけで路地裏の倉庫を借り、以前看護婦さんだったという女性を保母さんにして、十人足らずの子供を預かった。しかしどこからも援助は無く、子供に食べさせる昼食はお粗末極まるものだった。多分「アルソー」と言われていたと思う、大豆の搾りかすを車のタイヤのような形にして干したものを安く買ってきて、それを金槌でたたいて細くしお粥にしたり、たまにはメリケン粉にお砂糖を入れて蒸しパンを作って食べさせるなど、子供たちは目を輝かせながら「先生！ 明日もこのパンが

いい」などと言っていた。

ある日の午後のこと、一人の母親が来て「さっきこの子の父親が戻って来ましたので」と言っていて嬉しそうに子供を連れて帰って行く姿を見て、「皆のお父さんも早く帰って来て欲しいですね」と部長と話をした。そのとき、見知らぬ男性が名指しで私を尋ねて来た。「あなたは学校の先生ではないよね」と言うので「はい」と答えると、その人は「引揚者のためにぜひお願いしたいことがあるので」と言うので、疑いもせずについて行き近くのビルの上階の一室に入った。そこには学校の教室のように黒板に机椅子があつて、私と同年くらいの女性四人と数人の男性が、何やら話をしている人の言葉に聞き入っていた。私もうしろの席に座り話を聞いていると、驚いたことに「天皇廃止論」だった。この連中は共産党員だと気付き席を立つうと思つたが、下手に動いては危ないとじっとしていた。講義が終わったとき、さっきの男が「あなたも教師だったのだからしっかり勉強して、こ

れからは回りの人たちを教育して下さい」と言い、一人の女性を私に紹介した。彼女は北海道で小学校の教師をしていたことがあるとかで、一緒に頑張ろうと言った。私は朝から託児所で子供の世話をしているし、夜は店のプリン作りで遅くまで働いているので暇が無いと言ったが、その後も時々呼び出された。彼らは共産党のオルグたちで、ソ連軍の傘下に入り自分たちの言うことに従わない者は引揚げさせないと脅したり、難民救済と称して金品を取り上げたりして、一般の人々に恐れられていた。私の店にも私が託児所に出掛けているときに、彼らがやって来てお金を取り上げて行った。

ソ連という虎の威を借りる彼らは、難民救済などではなく自分たちのために悪辣なことを堂々とやり、それは次々にエスカレートしていった。ある日また呼び出され、仕方なく西広場だったかまたは大広場だったか忘れたが教会のような建物の中に入ると、茶谷先生も来ておられた。彼らは「今

日は人民裁判があるのでリーダーが発言したら賛成するように」と言った。やがてその人民裁判なるものが始まって壇上に年輩の男性が一人立たされる。共産党のリーダーと思われる男が「皆さん聞いて下さい。戦いに敗れた我々は皆苦勞をしており、特に北満から逃れて来た難民の人々は、皆で協力して助けなければいけないのに、この男は自分だけのうとうと暮らしていて、一銭の協力もしない。こんな人間を黙って許していいのだろうか」などと声を荒げて言うと、待っていましたとばかりに集まっている人が「お前は同じ日本人なのか、それこそ非国民だ」「そうだそうだが財産を没収しろ」などという声があちらこちらから上がったが、これは即ちさくらなのである。と、その中で女の声だったのでよく見ると、あのビルの一室で最初に紹介された小学校の教員だったというAだった。私と茶谷先生は、殺されたって彼らのさくらなんかになるものかと、絶対に口を開かなかつた。Aはそのために、後日大変な目に遭

った。

終戦後二度目のお正月がきたころ、知人も何人か引き揚げられ、あの宮成警部一家も帰国されたが、我が家にはなかなか通知がこなかった。

真冬の寒いある日、相談することがあつて婦人部長の住んでいたアパートに行ったときのことだった。何か外でがやがやと人の騒ぐような声がするので窓からのぞいて見ると、真向かいの商店の「きくや」から煙が上がり、人々が騒いでいた。

すると、部長は「ここにいて下さい」と言うこと飛び出して行った。はらはらしながら様子を見てみると、部長は大きな荷物を軽々と肩に担いでは外に何回も運び出していたが、間もなく真赤な火の手が上がり、中へは入れなくなってしまった。どうして消防車が来ないのだろうと思つていたとき、やっと一台の消防車がやって来たが、消防士は日本人ではなく中国人とのことだった。彼らは多分訓練などしていなかったのだろう。大きな声で何やら叫んだりはあるが、動作は鈍くホースからな

かなか水が出てこなかった。

その火事があつた翌朝のことだった。中国側から一世帯一人ずつ斧のような物を持って来いと言われたが、我が家にそれは無いので金槌を持って出ると、昨日の火事現場に並ばされた。見ると、道路は消化のときの水が凍つて盛り上がつていた。それをたたいてきれいにしろと命令されたが、大半は女性だったし厚い氷は簡単には崩れず、寒さに手足の感覚は無くなった。こんなつらい作業をさせられたのは、実は彼ら中国の消防隊のせいだった。火勢が激しくなり鴨居が崩れ落ちたとき、消防士は悲鳴をあげホースを放り出して逃げてしまったので、ホースから出る水は舗道にどんどん流れっ放しになったのだ。こうしたことだけではなく、これまでの日本の統治下にあつては考えられぬことばかりだった。

そうしているうちに引揚命令がきた。昭和二十二年三月八日の朝、正午までに大広場小学校に集まるようにとの通知に喜んだのも束の間、父だけ

は残れとのこと。「どうして父は帰れないのか父が何をしようのか？」とわめいてみてもどうしようもない。お父さんが帰れないのなら私たちも残ると言うと、父は「私は何一つ悪いことなどしていないから、絶対に大丈夫だから早く支度して行きなさい」と言った。引揚げが始まったころから、私たちはいつでも出られるようにと布団袋をほどこいて手製のリュックサックを作り、荷物も詰めてあったので心配なかったが、父一人残しては行けるわけがない。しかし、父は「弱っている義兄を早く連れて帰りなさい。お父さんは絶対に大丈夫だから」と言い、遂に私たちは父の言葉に従うことにした。

着れるだけの物を着て、だるまのようになった身にリュックサックを背負い、母と姉夫婦と私の四人は後ろ髪をひかれる思いで父一人を残し、大広場小学校へ急いだ。三月になったとはいえ、外はまだまだ寒かった。小学校に着くと、次々に人々が集まりやがて幾つかの班に分けられ、これから

一世帯ずつ所持品の検査があるので待つように、と言われた。全体の人数がどのくらいなのか分からなかったが、見渡したところ、かなりの人なので、これを一世帯ずつ検査するのは短時間では終わらないだろうと思った。とにかく義弟が心配なので、校舎の陰に入り座らせた。父は一人きりになって、どうしているだろうかと心配でならなかった。これだけの人数なのだからそう簡単には終わらないだろうと覚悟はしたものの、一時間経っても二時間過ぎても人の動きも無ければ何の知らせもなく、太陽が沈み始めると気温は急速にぐんぐん下がりがり、懐に入れてきたカイロもあまり暖かさが感じられなくなった。そうだ、何か食べれば暖かくなるかもと、お握りを出してみると、周りは白く凍っていて水筒のお茶もシャリシャリになっていて、口にはできなかつた。まだかまだかとその辺をぐるぐる歩いてみたり足踏みをしたりしているうちに、空腹と疲れからか急に睡魔に襲われ、うとうとしたとたん、「眠っちゃ駄目よ、

死んでしまふよ」と肩を激しくゆすられた。はつとして目を開けたが、頭はがんがんするしものどがものすごく痛かった。再び足踏みをしながら腕時計を見ると、既に午前二時を過ぎていた。

やっと順番がきて校舎の中に入ると、一人のソ連兵が日本人女性の肩に手を回し足をぶらぶらさせながら腰掛けていたが、私たち四人のリュックサックをあげさせ手を突っ込み、義兄の荷物からカシミヤのシャツを取り出し、最後に私のリュックサックからブラウスを二枚ひっぱり出すと、ほんとその女性に投げ、何やら笑いながらしゃべった。すると、その女性は「もういいから、早く出なさい」と言い、私にブラウスを一枚返してくれた。私たちはほうほうの体で荷物を抱え外へ出ると、空はもううつすらと明るくなっていた。

班ごとに分かれて二階の教室に入ると、床にはアンペラが敷かれ、軍隊で使われるようなごわごわした毛布が置かれてあった。それを見た私はアンペラの上に倒れ込み、そのまま眠ってしまった。

それからどのくらい眠ったのか分からないが、食事だと起こされた。しかし頭はガンガンするし、出された食事は粟のおかゆだった。私は持つて来たお握りを開いたが、それはもうポロポロになっていた。それでもそれを口に入れ、ゆっくり噛んで飲み込もうとするのが痛く涙が出た。

それから二、三日すると、遂に水も通らなくなり、私は昏々と眠ってしまった。周りの人が早く船が来ないとこの人はここで死んでしまうと、随分心配したとのことだった。もう六十年も前のことだから定かではないが、我々が乗る引揚船が来たのは、その大広場小学校に集まってから、多分一週間は過ぎていたと思う。

「船が来た！」と皆大喜びでリュックサックを背負い校庭に並んだが、列を作って埠頭まで歩いて行かねばならず、病気の義兄はどんなにか大変だっただろうか、熱に浮かされた私もまた時々膝がぐくんとなり、もう荷物はいらないと言ったりしたそうだが、自分ではまったく覚えてはいな

い。「ほら、着いたわよ」と言う姉の声に目を開け、タラップを渡り船底の部屋に入ると、驚いたことに父が現れた。後で聞いた話によると、一人残された父は毎日大広場小学校に収容された私たち団体の動きを見たり、引揚船入港を探ったりしていたそうで、当日は埠頭の入口に立っているソ連兵に、ありったけのソ連軍票を渡すと「ハレシヨ」と言われてすんなり通してくれたとのことだったが、もし「ノー」と言われたら、父はどうなっていただろうか。

この船は「英彦丸」という貨物船だと父から聞かされたが、すぐに白衣を着た船医が来てくれ、熱を測りのを診るなり「これはひどい」と言った。そしてすぐ注射を打ってくれた。

船がいよいよ出港するとき、もう再び来ることはできないだろうからと、父と姉はデッキに出て港を見に行くと言うので、「せっかく船に乗れたのに、ソ連兵に捕まったらどうするの」と私が言うのと、「あー！ もう大丈夫、船に乗ってしまえ

ば治外法権だよ」と言ったが、なんともスリリングな脱出劇だった。

船医が毎日注射を打ってくれたり薬を塗ってくれたお陰で、真白に化膿したのども良くなっていた。それに義兄と私にはちゃんと白米のお粥を出してくれたのが嬉しかった。

戦前、私が東京の学校にいたころ、夏休みに旅順の家へ帰省するときは、神戸から船に乗り確か三泊で大連に着いたと記憶していた。そのころの日満航路は、一万トン級の「鴨緑丸」とか「黒龍丸」などという立派な船だったが、「英彦丸」は貨物船だったので、ちゃんとした客室も無かったし速度も遅かったように思う。

大連港を出てから何日目だったろうか、デッキに出ていた父が、どうも大村湾に入るらしいと言うので上がってみると、かなりの人があちこち指をさしながら話し合っていたが、その顔は皆祖国日本に帰り着けたという安どからか嬉々としていたし、満州の秃山と異なり日本の島は緑がとても

美しかった。

船が岸壁に着くと、我々はすぐ下船できると思い、皆リュックサックを背負ったり子供の手をひいたりしてデッキに並んだが、なぜかなかなか降りしてくれない。と、突然に「畜生！」という大きな声で叫びながら船尾の方を指さしている男の人がいた。何ごとが起きたのかと思つて見ると、船から布団袋や柳行李のほか、たくさん荷物がどんどん降ろされていた。「あいつらは我々に荷物は一個と言つておきながら自分たちはあんなにたくさん持つて来たじゃないか」と言つて顔を真赤にして怒つていた。この時期の引揚は終わりに近い方で、あの連中もこの船に乗っているといううわさは耳にしていたので、ああやっぱりと私は思つた。

やつと船から降りると、今度は荷物の検査ということでまた並ばされ、貯金通帳や国債などは預かり後日返還すると言われた。しかし郵便貯金通帳は後に戻ってきたが、父が提出した戦時中に発

行された国債は、なぜか一枚も戻つてくることはなかった。

検査が終わると、今度は一人千円だけと言われて持ち帰ったソ連軍票と日本円の交換があり、収容所に入る前に頭から首すじから嫌というほどD Tをかけられ、髪の毛はたちまち真っ白になった。

やつと部屋に入り荷物をおろし、やれやれと一息ついたとき、なにやらわめくような声とどたどたと走る人の足音がしたので、なんだろうと窓の外を見てみたが、分からなかった。しかしそれからしばらくすると、部屋の前にアメリカ兵が立ちトイレに行くのにもいちいち許可を得なければならず、やつと日本へ帰り着いたのにまたかと思つて気が滅入つていた。そのうちに収容所の係の方が来て、父に来て欲しいと言われ父は一緒に出て行つた。大連で留置場に放り込まれたことがあつたので、またかと一瞬思つたが、「ここは日本だつたんだ」と思い直しあまり心配せずに待つてい

た。

一時間ほど経って戻って来た父から聞いた話は、なんとも恐ろしいことだった。それは、大連でソ連という虎の威を借り横暴極まりないことをやっていた、あの連中の帰国を待ち受けていた人々が、棒などで彼らをたたいたり投げ飛ばしたりした大騒ぎがあったとのことだった。大連で彼らに紹介されたあのAという女性も一つ前の船で帰ったが、そのときも袋だたきに遭った上にバリカンで丸坊主にされたとのことだった。そんなことが起きたために、そしてどうしてそういうことが起きたのかを調べるため、父のほかにも何人かの人々がアメリカの将校や通訳の日本人からいろいろと大連での様子を聞かれたということだった。

一件落着し、何日ぶりかでお風呂に入ったときは、本当に生き返ったようだったが、DDTをどっさりかけられた頭は、何回洗ってもギシギシとしてすっきりしなかった。

収容所には、多分三日くらいだったと思うがお

世話になり、諫早という小さな駅から汽車に乗った。この列車は「引揚者専用」となっていたが、各駅停車だったために、駅に止まるたびに駅員の制止をふり切って一般の乗客が我れ先に入ってきて、車内はたちまちいっぱいになってしまった。

ぎゅうぎゅう詰めのため、重くて走れないのでは思うほどゆっくりゴトンゴトンと走る汽車に揺られながら、私は満州の広野を走るあの流線型の素敵だった「あじあ号」を懐かしく思い出していた。

大連の収容所から扁桃腺で高熱を出し苦しんだ私は、船医の手当で元氣を取り戻していたが、このすし詰め状態はつらかったので、義兄はさぞかし苦しかったことだろうと今でも思う。

確か、列車が岡山駅に止まったときだったと思う。ホームにいた人が、どんどんと窓をたたくので何をするのかと思っていると、たんに窓が窓枠ごとストンと下に落ちた。窓があったと思うと、なんとそこからどやどやと人が入り込んで来た。その早業に呆気にとられたが、見ると女を交えた

若い七、八人の男たちだった。ただでさえぎゅうぎゅう詰めの中なのに、その連中は割り込み、しかも綱棚に腰掛け、座席の人の頭の上に足をぶらぶらさせる者もいた。これは単なる乗客ではないと私は思ったが、父も「怪しいから気をつけなさい」と小声で言った。彼らは手をたたきながら大声で歌ったり、傍若無人に騒ぎ立てていたので、皆疲れていても眠れなかった。しばらくすると、なぜか彼らは急に静かになったので、皆うとうとしてしまった。どこかの駅に着いたようだと思つたとき、彼らが窓から素早く飛び降りた。はっとして窓の外を見ると、引揚者のリュックサックを抱え線路をまたいで脱兎のごとく逃げて行く彼らの姿があった。彼らは、引揚者を狙ったスリ集団だったのだ。荷物を奪われた人たちは、ただただ茫然とするばかりだったが、私は激しい怒りに震えた。彼らは、きつと引揚列車を狙って悪業を繰り返しているに違いないが、警察は取り締まってはくれないのだろうか。日本に帰ればもう大丈夫

と思つてたのに、と私は情けなく思つた。

今、「のぞみ」に乗れば東京―博多間をわずか五時間余りで行けるが、あのとき私たちが乗ったのは超の字のつく鈍行列車で、諫早を出て終着駅東京に着いたのは、二日目の夜だった。こうして、苦しかった私たちの引揚げは終わった。

東京に着いたのが夜遅かったため、夜は駅の待合室で夜の明けるのを待った。翌朝姉夫婦は義兄の本籍地である茨城県へ行くために東京駅で別れた。両親と私は、雑司が谷の叔母（父の妹）の家を尋ねることにした。私は東京の学校の寄宿舎にいるときには休みの日に時々行つたので、迷うことも無く叔母の家に向かったが、家は跡形も無く消え、庭は荒れ果てていて池の水も干からびてしまい、なんとも侘びしい様子になっていた。私が「叔母さんたちはどうしたのかしら」と言おうとしたとき「千枝はきつと軽井沢に行っているのだろう」と父がぼつんと言つたが、その声には力がなかった。

母が「三郎のところに行ってみましようよ」と言うので、私たちはリュックサックを背負い直して本郷の叔父（母の弟）を尋ねることにした。しかしやっとたどり着いたそこは、町全体が焼けたのかどうか分からないが、以前とは様子が全く変わってしまっていて、叔父の家はどうしても見つめることはできなかった。

今度は、最後に残った葛飾の伯父（母の兄）を尋ねるのだろうと思ったとき、父が「これから葛飾へ行っても焼け出されているかも分からない。今からなら暗くならないうちに行けるから」と言い出して、両親の出身地房州鴨川へ行くことになった。

千葉駅で鴨川行きを待ったが、ここも人々でホームはいっぱいだった。男の人は皆申し合わせたように国防色の上着で、女の人はほとんどモンペ姿だった。そのときに、紺緋のモンペに籠を背負ったおばさんが「あんたがた、どこへ行くのか？」と聞いてきたので、これまでの話をす

ると、「そりゃあ大変だったねえ！ これ食べるかい」と言って、多分自分で作ったであろうと思われるあられを私にたくさんくれた。それは昼も食わずに歩き回った私たち親子三人の空腹を満たしてくれる、有り難い恵みだった。

日暮近く鴨川に着くと、父は懐かしそうに母と話をしながら、良い旅館があるからと言って連れて行ってくれたが、その「吉田屋」という旅館はなぜか営業していなかったもので、その近くの「さがみ屋」という旅館に行くと、部屋に案内してくれた女中さんが「お客さんは三人だからお米三合出して下さい」と言うのでびっくりし、引揚者なのでお米など持っていないと言うと「それではお泊めできません」と言われた。しかし、父が帳場へ行き料金割増ということで一件落着。その夜は、本当に久しぶりに布団の上で手足を伸ばして、ゆっくり眠った。

翌朝、父は鴨川役場に行くと、雑司が谷の叔母はやはり軽井沢へ、本郷の叔父はこの鴨川にそれ

それ戦時中から疎開していることが分かった。急いで宿を出て、叔父の住む所を訪ねてみると、そこはクリーニング店の二階だった。お互いの無事を喜び合い、葛飾の伯父は大阪の息子の所にいることも分かり安心した。

房州は、気候も温暖だし新鮮な魚もたくさん獲れる良い所ではあるが、間借りしている叔父の所に私たち三人が転がり込むことにもゆかず、軽井沢へ行くことになった。また東京に戻り上野駅へ行ったが、汽車の切符を買うのがまた大変だった。当時上野駅の地下道は浮浪者の溜まり場になっていて、ぼさぼさの髪、ぼろぼろの衣類をまとった人たちがいっぱいいて、汽車を待つて並んでいる我々に物乞いをし、何か手にするまではしつこくつきまとうのだった。悪臭の漂うその異様な光景に、ここは日本ではないのか、美しい日本はどこへ行ってしまったのかと情けなく思うと共に、戦争によって人々はこんなにも変わってしまうのかと、涙が止まらなかった。

早くこの場所から逃げ出したいと思ったが、汽車が発したのは十一時ごろだった。そしてこれもまた鈍行で、山岳地帯に差しかかると、突如汽車は後戻りをするかと思うと、また前進したりを繰り返すので不思議に思っていると、父が「これはアプト式と言って、山は一直線には登れないのでジグザグに進むのだ」と教えてくれ、ゴットンゴットンと揺れながら私はまた満州の広野を走る、あの素晴らしい「あじあ号」を懐かしく思った。

そして、軽井沢に着いたのは翌日の朝六時だった。沓掛駅から叔母の別荘がある千ヶ滝までかなり歩いたと記憶しているが、父の顔を見るなり「まあ兄さん！」と言ったまま叔母はオイオイと泣いていた。

四、五日はゆっくりとしたが、こうして何もせずいつまでも叔母の世話になっているわけにはいかない、なんとか働かねばと思っていたとき、義兄の様子を見に行くようにと父に言われた私は、ついでに東京で何か働き口をみつけようと、翌日

早速東京へ向かった。沓掛駅から汽車に乗ってしばらくしたときだった。「神崎さんでしょう？」と声を掛けられびっくりして見ると、大連で喫茶店を開いていたときにすぐ近くに住んでいた、加藤さんというおばさんだった。加藤さんは私などよりずっと早く引き揚げられたが、今は長野で自分のお兄さんがやっている衣料品店を手伝っているとのことだった。私が働き口を見つけに行くのだと言うと、大連ではいろいろお世話になったし、早く帰して頂いたので、もしいやでなかったら家の店の衣料品を売ってみませんか、と言ってもらった。しかも、品物は貸してあげるし代金は急がなくて良いから、品物が売れたら持って来て下さいとのこと。願っても無い有り難い話だったので、私は姉の所へ行き明日はすぐ引き返し長野に行くことを約束し、上野から常磐線荒川沖の引揚者寮へ向かった。義兄は着いてすぐに土浦の病院に搬送され、姉は保険会社の外交員として働いているとのことだった。すぐにひと駅歩いて義兄を見舞

ったが、頬はげつそりとこけ、栄養失調のせいかな伸びた髭は赤茶色となり、かすれた声で「ありがとう」と言う言葉もやっと分かったほど弱々しかった。そしてそれが義兄に会った最後で、それから数日後にこの世を去った。

翌朝、私は姉のリュックサックを借りて長野に行くのと、いろいろの衣料品をたくさん貸して下さり、今はまだ衣料品がなくて困っている人が多いので、必ず売れるから頑張つてと言ってもらった。軽井沢に戻った私は、翌日から農家を目当てに出掛けたが、加藤さんが良く売れると言ったのになぜか品物はなかなか売れず、下着とか軍手などを少し売っただけで、第一日目は終わった。次の日もその次の日も同じような有様だったが、ある農家で言われた言葉に感じるものがあった。それは「あんたら、以前はいい暮らしをしたらどううが」とさげすんだように言われた言葉だった。「いいえ、私は引揚者です」と言おうとしたが、それを言うのと哀れみをこうように思われるのがい

やで黙って引き下がったが、全体的にそういうような空気を感ず、ここで商売するのを断念した。

「どうしたら売れるのだろうか」「どこに行けばいいのだろう」などと、当初意気込んでいた私だけに、いささか落ち込んでいたところに「義兄死す」の訃報が届き、両親と共に姉の許に急いだ。

形だけの淋しい葬儀を済ませた後、両親は軽井沢へ戻り、私はなんとか売らねばと背負って来たリュックサックを背に、翌日から引揚者寮から一番近いという稲敷郡の農村へ出掛けた。

松林を抜けたり田圃道を通ったり、一時間以上歩いて最初に飛び込んだ農家は、私にとつて勇気を与えてくれた幸運の家だった。まず感じたのは、暖かい人情だった。そして一番売れて欲しいと願っていた、洋服の生地や男物の上衣やズボンなどを買ってくれた。そして代金の半分は現金で、あとの半分はお米で良いかと言われて、なんと白米を二斗も出されていささかびっくりした。これからまだ商売するのに、二斗のお米を背負って歩

くわけにはゆかないので帰りに寄りますとお米を預け、その家が桜井さんという名前を聞いて、次の家へ向かった。どこの家の人も皆優しく親切で「一人で大変だねえ」と言つて、玉葱とじゃがいもをたくさんくれた家もあつた。あちこち回ってリュックサックの中もほとんどなくなり帰り道を急いだが、初めて来た所だしあちこち回り、それにどの農家も生垣に囲まれた黒い瓦屋根の同じような家なので、最初の桜井さんの家が分からなくなつてしまった。仕方なく一軒の家に入り、この辺に桜井さんという家はありませんかと訪ねると、うちは桜井ですと言ひ、この辺はほとんどが桜井の名字だと言われ啞然としてみると、その家にはどんな人がいたかなどといろいろ聞かれ、私がこんなおばさんにこんな人たちだったと言つと、「あー、きつとだれだれ兵衛の家だろう」と言つてわざわざ最初の桜井さんの家まで連れて行つてくれた。二斗のお米はリュックサックいっぱいになり、家の人に背負わせてもらひ、片手に玉葱もう一方

の手にじゃがいもを持って、よろよろしながら帰ろうとすると、「大丈夫かい、気をつけて帰りなさいや」と暖かい言葉をかけてくれた。

当時はお米も配給制だったので、個人で勝手にお米を売買することは禁じられており、リュックサックのお米を背負って白昼堂々と歩くことはできず、松林の中を歩いた。途中肩に食い込むリュックサックが重く、背中から降ろそうと思ったが、一度降ろしたら一人では絶対背負うことはできないと思ひ、松の木に寄りかかりひと息入れては歩きを繰り返した。日暮れ近くになってやっと引揚者寮に帰り着いたが、二階の姉の部屋まで運ぶ力は無く、階段の下にへたり込んでしまった。

翌日、姉は保険勧誘のため上野界隈を回ると言うので、私はお米を一升ずつに分け、姉に付いて行った。保険に入ってくれる人はなかなか無かったが、お米はどこの家もすぐに買ってくれた。お米は配給生のはずだが、なぜか軽井沢ではお米は一粒も配給されず、玉蜀黍とか甘藷の粉しかくれ

なかったもので、残しておいた三升のお米を持って両親へ届け、長野の加藤さんの所へ売上金を持って行った。加藤さんは、よくこんなに早く売れましたねと言って、またたくさんの品物を貸して下さった。それを担いでまた荒川沖へ戻り、農村に売りに行き売上金を持って長野へということの繰り返しが続いた。農家の忙しいときは衣料品を売るのをやめ、一日畑の草取りを手伝ってお米をもらうことも何度かあったが、満州育ちの私にとってお米のなる木も見ただけで分らないし、畑の作物もそれが何なのか全く分からなかった。しかし、農業とは大変な仕事だということを知った。

重い荷物を背負って何キロメートル歩くことも、また慣れぬ畑の草取りも決して楽ではなかったが、それ以上に長野を往復するたびにあの上野駅の地下道に何時間も並んで汽車の出るのを待つことの方が、何よりもつらかった。浮浪者たちがそばに寄って来て、何かよこせと手を出されると、恐ろしさに身の縮む思いだった。

衣料品の行商を始めて半年くらい経ち、軽井沢もかなり寒くなったところだった。父が突然「ご苦労だったね！ 大変だったろう！ もう行商はやめなさい」と言った。やっと恩給がもらえるようになったから大丈夫、と聞かされた私は何よりも一番に「ああ、もうあの地下道に並ばなくていいんだ」と思い、ほっとしたものだだった。

昭和二十二年に祖国日本に引き揚げて来てから、今年でちょうど六十年。私は八十五歳となったが、幸いなことに持病もなく、過ぎ去ったあのころのことを思い出しながら、今は一人静かに余生を送っている。

戦争はいつも多くの人々の生命を奪う。終戦直後、大連ではあの混乱の中、医者に診てもらおうこともできず、姉は幼子を失い、やっと支えながら引き揚げて来た夫を亡くし、兄も関東軍からシベリアに抑留され戦病死となり、我が家だけでも戦争故に三人の命を失ったのである。そして戦争は、人の命だけではなく様々なるものを破壊し、人々の

運命をも狂わせるが、決して幸せはもたらしてはくれない。

どんなことがあっても、決してもう二度と戦争はしないで欲しいと、切に願っている。